



新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

# 帆樫成林

Vol.57

# 帆樫成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館 博物館ニュース vol.57

「帆樫成林」とは？  
帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

## CONTENTS

<b>特集1</b>	<b>新潟市文書館 開館一周年を迎えて</b>	<b>P.2~3</b>
<b>特集2</b>	<b>企画展 近世新潟町展 —地下に広がる江戸時代の町—</b>	<b>P.4</b>
歴史さんぽ	若宮神社の太子講碑	P.5
おすすめの一冊	江戸城御庭番	P.5
研究notes(第38回)	明治新潟と天気予報	P.6
館長日記	新潟の歴史的原点と古町の由来	P.7
収蔵資料紹介	小島丹彦画「夏日」	P.7



おはなしみなとぴあ・新潟市立中央図書館ほんぼーとのBook Pack(団体貸出サービス)を利用して収蔵品展「むかしばなしの世界」にあわせた図書閲覧コーナーを特設しています(～2/5)

印刷/株式会社博進堂  
編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
帆樫成林「はんしょうせいりん」第57号 発行日 令和5年1月18日

各イベントは新型コロナウイルス感染症にともなう状況等により中止または内容を変更する場合があります。

## 【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
1月22日① 14:00～15:00	光が透ける窓飾りづくり	くもり空が続く新潟の冬の窓辺が楽しくなるような、光が透ける窓飾りをつくります。	どなたでも・申し込み不要(当日先着8名)・無料
1月28日② 14:00～15:30	企画展関連 裂き織りコースターづくり	お菓子箱で簡単な裂き織りコースターを作ってみましょう。「つるのおんがえし」にてくる「高機(たかはた)」もみて、さわってみましょう。鶴のように返返ししがたくなるかも…?	どなたでも・申し込み不要(当日先着8名)・無料
1月29日③ 14:00～15:30	企画展関連 逆ものがたり	会場にある昔の道具をつかって、自分だけのものがたりをつくってみましょう。どんな結末がまっているかな?	どなたでも・申し込み不要(当日先着8名)・無料

お申し込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申し込み締切日は、当館までお問い合わせください。

## 現在開催中の企画展

### 「収蔵品・新収蔵品展」

資料の収集・保存は博物館の重要な事業です。今回の収蔵品展では、「むかしばなしの世界」というテーマでむかしばなしに登場する道具を、おはなしの一場面とともに紹介します。新収蔵品展では、当該年度に新たに収集した資料を紹介します。

**会期** 2022年12月10日(土)～2023年2月5日(日)  
**休館日** 毎週月曜日(1月9日は開館)、12月28日(水)～2023年1月3日(火)、1月10日(火)  
**主催** 新潟市歴史博物館  
**協力** ほんぼーと新潟市立中央図書館  
**観覧料** 無料

## 博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

**【時間】** 10時～11時30分  
**【会場】** 本館2階セミナー室  
**【申し込み】** 要事前申し込み(定員60名程度)  
**【資料代】** 100円

◆1月の講座：1月22日(日) ※申し込み開始：1月5日  
ごっつお!ごぼれ話 —新潟の米を見直す— 講師：中村里那  
◆2月の講座：2月26日(日) ※申し込み開始：2月8日  
引札からみる明治期の諸商売 —全国各地と新潟— 講師：若崎敦朗

## 次回企画展

### 「近世新潟町」展

信濃川河口部左岸の新潟町は、江戸時代に日本海側有数の湊町として栄えました。近代的開発が進んだ現代の街のなかに江戸時代の面影を見つけることは難しくなっていますが、地下深くには江戸時代の痕跡が広範囲にわたって残っていました。それは「近世新潟町跡」と名づけられ、平成16年から新潟市によって試掘調査が行われています。出土した遺構や遺物からは湊町の繁栄や町人の暮らしぶりが見えてきます。地下から見つかった資料と絵図などの記録をもとに、江戸時代の新潟町を解き明かします。

**会期** 2023年2月18日(土)～3月26日(日) **休館日** 毎週月曜日、3月22日(水)

## みなとぴあ便り

みなとぴあの敷地には昔の新潟町の川岸と堀をイメージした3つの水路があります。旧税関前の信濃川旧河道、本館正面前の四間堀、石庫脇の通り名そのままの早川堀です。



堀設備は水の流れを作り出す流水ポンプが地下に埋まっており、ろ過ポンプや紫外線ランプ等で水を浄化するなど日々のメンテナンスのほか、春には水をすべて抜いて約1ヶ月かけて3つの堀の大清掃を行っています。今年度は四間堀の流水ポンプが老朽化で停止したため新しいポンプに入れ替えました。桜や柳との相性も良く、夏には川祭りで旧河道に灯籠を浮かべ、秋には早川堀脇でキャンドルナイトが行われるなど、イベントでも利用されています。四季折々の美しい堀の景観をお楽しみください。(企画普及課 設楽)

## お知らせ

■2023年2月6日(月)～2月14日(火)まで施設整備のため休館となります。

### 旧小澤家住宅企画展

**【展示】**  
■「カルタと双六」展 会期：1月7日(土)～2月1日(水)  
■「ひな人形とからくり人形」展 会期：2月18日(土)～3月21日(火)

開館時間：午前9時30分～午後5時  
休館日：原則月曜日、祝日の翌日、年末年始  
入館料：一般200円 小中学生100円(土・日・祝日は無料)  
所在：新潟市中央区上大川前通12番町2733(みなとぴあから約800m、徒歩12分)  
TEL:025-222-0300

## 編集後記

今回は新潟市文書館の取り組みについて紹介しました。文書館を利用した当館ボランティアからは「歴史資料が身近なものになった」といった声を聞いています。今後文書館をより利用してもらうためには、施設の役割をはじめ所蔵資料の周知が重要になると思います。そのためにみなとぴあをはじめとした市内の資料館・博物館や市民との連携も期待されます。(鈴木)

### お問い合わせ・申込みは博物館まで

**新潟市歴史博物館 みなとぴあ**  
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
Tel：025-225-6111 Fax：025-225-6130  
E-mail：museum@nchm.jp URL：https://www.nchm.jp  
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28～1/3)  
【開館時間】(4-9月)9:30～18:00/(10-3月)9:30～17:00

2022年度

みなとぴあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとぴあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



## はじめに

「新潟市文書館」(以下「文書館」)は、歴史的に重要な公文書等を適切に保存し、市民等に広く利用してもらうための施設として、令和四年一月八日(土)に開館しました。

文書館では、歴史公文書等を温湿度管理のできる収蔵庫等で保存し、利用申請に基づいた利用提供をはじめ、所蔵資料の公開等により情報発信、新潟市の歴史に関する調査・研究を支援しています。

開館から一年が経過し、開館に至るまでとその後の運営を振り返りながら、「新潟市文書館」の特徴、事業等を紹介します。

## 小学校の校舎を活用

新潟市は、平成二十五年三月に外部有識者らに意見を頂きながら、「(仮称)新潟市文書館整備基本計画」(以下「基本計画」)を策定しました。基本計画では、文書館設置の必要性からはじまり、具備すべき基本的機能が示されたほか、施設の整備にあたっては、「既存施設の有効活用を」との方針が示されました。



旧太田小学校(新潟市北区)の校舎を改修

活用されることとなった小学校の校舎は、平成三十年三月に惜しまれながら閉校となった「旧太田小学校」校舎(新潟市北区)。三階建ての校舎は、

その後、文書館の設置場所等が検討される中、新潟市の公共施設の再編等の動きもあり、地域ごとの公共施設において、文書館は廃校となる小学校の校舎を有効活用して整備されることになりました。令和元年度に基本・実施設計、令和二年度に改修工事を行い、令和三年度は一月の開館に向けた準備を進めました。



太田小学校の校歴品を展示した講座室

新たに「新潟市文書館」として生まれ変わるようになりました。小学校の校舎という特性を活かしながら文書館の設置目的を果たすため、教室の多くを資料収蔵庫に改修し、特に三階部分はすべて資料収蔵庫として活用することになりました。そのほか、職員室を閲覧室に、ランチルームを講座室に改修することで、市民の利活用に必要な機能を備えました。文書館の講座室には、太田小学校の校舎や歴代校長先生の写真、児童が各種スポーツ大会で獲得したトロフィー

等、学校の歴史を顧みることのできる校歴品を展示しています。太田小学校の歴史は文書館の歴史の礎であるとして、地域の方々のご協力のもと展示に至ったものです。なお、建物自体は小学校時代、地域の避難所として機能していたことから、文書館としての開館後も避難所に指定されています。

## 公文書管理条例と文書館

基本計画の策定後、文書館の設置検討が進められるのにあわせ、公文書管理の所管部である総務部において、新潟市における公文書に関する条例制定の検討が進められ、令和三年に「新潟市公文書管理条例」が制定されました。

同条例では、市の諸活動や歴史的事実の記録である公文書は、市民共有の知的資源であり、市の諸活動を現在及び将来の市民に説明する責務が全うされるよう、行政文書の適正な管理、歴史公文書等の適切な保存・利用等を図ることが謳われました。

また、新潟市政を検証するために後世に残すべき重要な文書のうち、保存期間が満了した行政文書や、個人の方等から寄贈を受けた文書等を「特定歴

史公文書」と位置づけました。

新潟市文書館の設置根拠である「新潟市文書館条例」は、「新潟市公文書管理条例」と同時に公布され、「新潟市公文書管理条例の趣旨にのっとり、特定歴史公文書を適切に保存し、市民等の利用に供する」ことが明記されました。これにより新潟市における歴史公文書等の保存・利用等に関する制度面・施設面が整うことになりました。

## 開館後の主な取り組み

令和四年一月の開館以降、文書館設置目的を踏まえ、各種事業に取り組みんでいます。これまでの主な取り組みを紹介します。

### (一) 特定歴史公文書等の保存・利用提供

文書館では、温湿度管理ができる収蔵庫を中心に特定歴史公文書をはじめ、刊行物、複製資料等を保存しています。その他、開館前にも資料の保存場所として使用していた行政庁舎の書庫等を引き続き活用しながら資料を保存し、すべて含めると資料の点数は約四一万点になります。

特定歴史公文書の利用提供にあたっては、市民等からの利用申請に基づき、必要な審査を行い、原則一五日以内に利用の可否を決定しています。利用は文書館での「閲覧」、もしくは「複写」したものの提供によります。

### (二) 新潟市の歴史に関する資料の収集

新潟市(文化スポーツ部歴史文化課)では、文書館開館以前においても、保存

期間が満了した行政文書のうち、後世に残すべき文書については引き継ぎ、また、市民等から寄贈を受けた資料等を閲覧に供する行政サービスを行ってきました。

文書館では、新潟市公文書管理条例に基づいた行政文書の移管とあわせ、引き続き、市民等が所有する資料について、新潟市の歴史が検証できる資料の場合は文書館へ寄贈してもらう等、歴史資料の保存に関する相談や必要な調査を行っています。

### (三) 情報発信

文書館が開館し、文書館自体を知っていただくための各種広報をはじめ、新潟市の歴史について理解を深め、関心をもってもらうための歴史講座を開催しています。文書館が開館した翌月には開館を記念し、元総務大臣で鳥取県知事等も務められた片山善博氏に「公文書館を地域の知と歴史の拠点に」と題しご講演いただき、公文書館の目的や役割、新潟市文書館とはどんな施設なのか等を市民に周知しました。

歴史講座は、文書館の開館前においても文化スポーツ部歴史文化課の主催で市内会場を借りて開催(令和二年度はコロナの影響により中止)していましたが、令和四年度からは文書館として、市内会場での開催に加え、文書館講座室を会場にした講座の開催を企画・実施しています。

開館以降の新たな試みとしては、小中学生を対象にした歴史講座を開催したことです。文書館開館以前の資料の

閲覧サービスの利用者や歴史講座の受講者は、比較的年齢層の高い方々が多い状況でした。文書館ができたことを機に、子どもたちにも文書館の目的や役割を知ってもらうとともに、新潟市の歴史に関心をもち、今後の学習にも役立ててもらえればと思います。



夏休み期間中に子ども向け歴史講座を開催

### (四) 資料の公開・活用、調査研究の支援

文書館ができたことにより、開館前までは行うことができなかった所蔵資料の展示ができるようになり、文書館の資料公開室において、常設展示企画展示を行っています。展示という手法により、文書館が所蔵している資料の公開・活用に努め、市民等に新潟市の歴史について理解を深めてもらうとともに、文書館に来館するきっかけになればと考えています。また、文書館の資料を利用する市民

の利便性を高めるため、文書館の開館と同時に「文書館所蔵資料検索システム」を開設しました。文書館の所蔵資料の目録をインターネット上で検索できるシステムで、自宅のパソコンやスマートフォンから利用でき、探している資料の有無が来館せずともわかるようになっていきます。利用したい資料が決まっている場合は、メール、ファックスでも利用申請を受け付けており、「複写」による利用の場合であれば、遠方の方は来館することなく利用できるようになっていきます。

## おわりに

新潟市文書館は、年度を通しての館運営は令和四年度が初めてとなり、まずは特定歴史公文書の保存・利用提供といった基本業務を適切に行いながらも、博物館や図書館に比べ、まだ認知度が低いと思われる文書館の役割や業務について、講座の開催等による情報発信に努めました。

今後は、子どもたちを対象にした歴史講座を引き続き開催し、総合学習や社会科の授業で文書館を役立ててもらおうような方策も考えていきたいと思っています。幅広い年代の方々に利用していただきながら、多くの方に新潟市文書館を知ってもらい、地域の方々にも愛される施設運営を心掛けていきます。

(まつもと ゆうき 館長)

(会期 二〇二三年二月十八日〜三月二十六日)

小林 隆幸

なにげなく過ごしていた町、その一角が江戸時代の遺跡だった!

古町地区とも称される新潟市の中心市街地の地下には、江戸時代の町の痕跡が広く残っていることがわかってきました。このエリアは明暦元(一六五五)年に移転しあらたにつくり直された新潟町です。現在の町並みはその町割りをほぼ保ちながら、その上に積み重なるように存在しています。

最初に町の痕跡が確認された平成十六(二〇〇四)年以来、この範囲で開発がなされる際には試掘調査が行われるようになりました。その結果、次々と江戸時代の町の跡が姿を現し、確認できた場所は「近世新潟町跡」として登録されるとともに、当時の人々の暮らしぶりをより鮮明に伝えてくれるようになりました。



近世新潟町の町並み(北国一覽写 長谷川雪旦 天保2(1831)年)

迎えると、元和三(一六一七)年に長岡藩主・堀直寄によって町建てされました。この時の新潟町は現在地より海側にあったとされています。しかし、信濃川が運ぶ土砂により、大きな中洲が町の前面に立ちあがるようになり、信濃川河口部にあった新潟の湊の機能は低下し、明暦元年にその中洲に町を移転させました。

中洲は水上交通の面で優れる一方、地盤は軟弱であることが多く、新潟町も土地の不安定さに配慮しながら町の建設に努めたと想像できます。それを示す痕跡が発掘調査で確認できました。平成十八年に新潟県教育委員会の依頼で財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が行った調査では、建物の基礎に「そろばん地業」と呼ばれる、幅広の木材の礎板の下にミカン割りした丸太を三本並べて沈下防止をはかる措置がとられていました(註二)。その上に礎石を置いて建物を建てていたようです。立地の環境に合わせた建築の工夫が読みとれます。

また、屋敷地は複数回にわたってかさ上げされていることもわかりました。江戸時代の町の痕跡は、海面よりもずっと低い地下二メートル以上から見つかることもあります。これは地盤沈下によるもので、当時もそれによって洪水などの水害もたびたび発生していたと考えられます。沈下としては盛土をして町を維持してきた町民



建物の礎石と礎板(新潟市文化財センター提供 新潟県教育委員会撮影)

の努力が調査からうかがえました。

また、わずかな調査範囲であるにもかかわらず、数多くの陶磁器が見つかったことも特徴の一つです。その多くは唐津焼や伊万里焼と呼ばれる九州肥前の焼き物です。新潟は北前船が寄港する日本海側有数の湊町でした。活発な日本海交易を物語るとともに、新潟町の町人たちは、こうした九州の高級な焼物を好んで売買し所有していた様子もうかがえました。

さらに調査では、商人の屋敷があったとされていたところからは、その商人の名を

示す「わかさや」や「播磨屋」と書かれた木簡が見つかり、職人が居住するエリアからは、作業の状況が読み取れるような資料が確認され、記録上知りえていた歴史をさらに裏付ける物証となっています。椀店が並ぶところでは漆職人が漆を漉すときに用いた漉し紙や塗るときに漆を入れた皿、漆器の製品などが出土し、鋳物師が居住したところからは鍛冶に使用する炉の一部やフイゴの羽口、鉄を流し込む鋳型などが出土しています。また、花街があったと思われるところからは宴会に使用したと思われる大皿の磁器などが出土し、地点は異なりますが、手鏡や簪、紅皿など女性の身だしなみを整える道具も出土しており、多くの芸者衆がいたことで評判だった新潟の、芸者たちの持ち物であったのではないかと想像が膨らみます。

本展は、これまで調査を実施してきた新潟市文化財センターの協力のもと開催します。こうした地下から掘り起こされた江戸時代の品物や建物跡などを中心に紹介しながら、当館が所蔵する絵図などとともに、江戸時代の新潟町の姿をのぞいてみます。

(こばやし たかゆき 副館長)

(註二)新潟県教育委員会二〇〇八『近世新潟町跡広小路堀地点』

歴史さんぽ

若宮神社の太子講碑

新潟市西区五十嵐二の町 若宮神社境内

日本海に近い小高い丘の上、鬱蒼と松の林立する神社の境内に、その碑はあります。

新潟市西区五十嵐二の町の若宮神社社殿に向かって左側。全長3mはあろうかという巨大な太子講の碑です。すぐ側には講を実施する際に使用されているとみられる東屋が建っています。

講とは、地域社会を母体として信仰や経済、職業上の目的のために結成された集団を指します。よく知られているのは寺社信仰のひとつである伊勢講や古峯講で、定期的な集会和参宮(代参)を目的に結成されるものです。そのほか、民俗信仰を基盤に、山やその神の祠を祀る山の神講や、決まった日に集まり念仏を唱える念仏講、特定の日時を意識した庚申講や二十三夜講などがあります。また、経済的に金品・労力の相互扶助を目的とした講には、頼母子講や無尽講があります。

さて、このうち太子講とは大工・左官・鍛冶屋・屋根葺き・桶屋などの主に建築関係の職人によって結成される集団です。聖徳太子を守護神とし、その姿が描かれた掛軸や碑を祀ります。聖徳太子が四天王寺や法隆寺(斑鳩寺)の建築に携わったことから、工匠の祖として祀られるようになったことに由来するとされています。

東屋内の太子像の碑には、「孝養像」と呼ばれる

姿が刻まれています。父・用明天皇の病氣治癒を祈願した16歳のときの姿で、柄香炉を持ち、髪を美豆羅に結い袈裟を付けた姿が基本で、この若宮神社に建つ碑もそれに倣っています。地域によっては手に持つものが曲尺に代わっているなど、バリエーションがみられるようです。

碑の台座に刻まれた情報によると、昭和6(1931)年に元碑が建立され、現在の碑は平成7(1995)年にこの地へ移転してきたようです。同町内には建設会社もあり、こうした職業の人びとが母体となり、地域に根差した信仰や関わり合いが、現在へと受け継がれているのを感じます。

太子講は忌日である2月22日に多く行われるといえます。未だ地元の方にお話を聞いていませんが、この冬、機会をうかがって地域の信仰のすがたを調査してみたいと思います。

山田 祐紀(やまだ ゆうき 学芸員)



おすすめの1冊

江戸城御庭番

「御庭番」というと、私は漫画「るるるに剣心」の登場人物「御庭番衆」を思い起こします。漫画の「御庭番衆」は、江戸幕府によって組織され、忍者のような服装で奇抜な武器を使い戦う人々として描かれています。

漫画の登場人物としての「御庭番衆」も魅力的ですが、実際の歴史上にも「御庭番」が存在することが知られています。深井雅海氏は御庭番に関する古文書を読み解き、その実像を明らかにしています。御庭番は、紀州藩出身の八代将軍徳川吉宗に依り紀伊(和歌山県)から江戸へやってきた徳川直臣です。諸国を探索して情報収集をし、将軍へ直に情報を伝えるのが役目でした。本を読み進めていくと、伊賀・甲賀のような忍者とはイメージが大きく異なることがわかってきます。

新潟との関わりでは、幕末の初代新潟奉行川村修就が御庭番の出身です。この本では、修就の子である帰元が御庭番の職務について語ったことも紹介されています。

(田嶋 悠佑 学芸員)



深井雅海 著  
平成30(2018)年(初出1992年)  
吉川弘文館 発行

# 明治新潟と天気予報

## 気象事業のはじまり

現在、天気予報などの気象情報は生活のなかで欠かせないものとなっています。天気を確認するのはもちろんのこと、近年では気象災害から身を守るために利用する機会も多くなりました。気象事業は明治時代にはじまりました。明治八(一八七五)年六月、内務省は東京気象台を設立し、気象観測を開始します。その後、日本各地に測候所を開設し、気象観測地点を増やしていきました。そして明治十六(一八八三)年三月に天気図の配布を開始し、五月には全国暴風警報を、翌年には全国天気予報をはじめました。

新潟では明治十四年に新潟測候所が学校町通に設置され、気象観測が行われました。その後、明治二十七(一八九四)年には地方天気予報を、四十一(一九〇八)年には地方暴風警報を開始し、県内でも地域ごとの気象情報を入手できるようにしました。

## 天気はどこで知る？

警報や予報はどのような方法で人々に伝えられたのでしょうか。事業開始当初は掲示場での掲示、新聞や官報への掲載といった周知方法がありました。

掲示場については、明治二十二年に新潟警察署前と九か所の巡查派出所(営所通、古町、東仲通、西湊町、学校町、西堀通、本町通、下大川前通、魁町)に天気予報の掲示場が設置されました。「信号標」というユニークな方法もありました。信号標とは赤白の棒に球や旗を掲げて警報や予報を知らせるものです。警報を発令する際は棒に赤い球を掲げ、その下に風向きを示す赤い円錐を掲げます。予報の場合は天気を示す長方形の旗、風向きを示す三角形の旗、気温の変動を示す三角形の長い旗を掲げ色の違いでそれぞれの情報を伝えました。

新潟区には、明治十八年に初めて暴風警報信号標が西船見町の海岸に設置されました。これは同年に新潟区役所が港の水先案内を務めていた水戸教を「暴風警報管理人」に任命していることから、水戸教により警報が発令されていたと考えられます。また明治四十一年には地方暴風警報の開始にともない、旭町通(新潟測候所敷地内、明治二十四年移転)、西船見町、萬代橋南西隅の三か所に暴風警報信号標が設置されました。当時暴風警報信号標の多くは測候所をはじめ、海上交通利用者への周知のため海岸周辺に設置されました。また萬代橋に設置されたのは、川蒸気船



二代目萬代橋に設置された暴風警報信号標(大正期)

といった河川舟運での利用はもろろんのこと、人々に広く周知することを目的としていたと思われる。なお、同年には電報による周知が開始され、より多くの人に気象情報を提供できるようになりました。

## 測候所の予報は信じない!

当時の気象事業は観測点が少なかつたことから予報の精度が低く、予報が外れることがありました。また当時の周知方法では気象情報を十分に伝えること

鈴木 彩也花

ができず、人々に誤解を与えてしまうこともありました。そのため、測候所の予報を信用していない人も多くいました。明治三十二年に小説家である尾崎紅葉が病氣療養のため新潟を訪れた際の記録「煙霞療養」(春陽堂 一九〇四年)には、「大川前の越佐汽船會社店前には乗客廣集して、晴々と旭の輝く下に誰一人彼の警報に就て案じるらしい顔色をした者も無い」と暴風警報の発令を気にかけない人々の様子が記されています。また天気予報については、水戸教が行う予報の方がよく当たるといった声もありました。昭和に入っても「小學校などで、遠足の前夜、測候所の豫報だけで安心が出来ず、よく天気を氣づかつて、電話をかける水戸教」(新潟市小学校教員会「郷土読本」(新潟目黒書店 一九三五年))といった記載がみられ、測候所の予報がなかなか定着しなかった様子がうかがえます。

このような状況は、予報精度の向上やラジオやテレビといった周知方法の多様化などによりしだいに改善されていきました。

(すずき さやか 学芸員)

## 【参考文献】

- 新潟地方気象台「創立百年誌」(一九八一年)
- 同「新潟百年誌」(一九八二年)

## 新潟の歴史的原点と古町の由来

信濃川河口の港町新潟は近世に大きく発展し今日に至ります。その中心地はかつて市役所や百貨店などがあった古町です。町の中心地をなぜ古い町というのか、私は前から気になっていました。まずは、古町周辺は明暦元(一六五五)年、海岸側にあった「古新潟町」から移転してきましたが、古新潟町の位置や歴史などもはつきりしません。町としての新潟の原点は不明瞭です。この秋、講演依頼もあって、近世の新潟を調べてみることにしました。頼りにしたのは、「新潟市史」と当館学芸員です。個人的には予想以上に興味深い発見がありました。

新潟の街路は、古町・本町、西堀・東堀などの南北に長い通りに、榎谷小路などが直交しています。この基本形はすでに市史に載る古新潟町の図にみられます。古新潟町は元和三(一六八七)年に長岡藩により大幅に拡張され、既存の町に新町などが加えられました。この新町が発展して「本町」となり、元の本町が「古町」となりました。古町の起源はまさにこれです。明暦元年の移転は、寛永八(一六三三)年の信濃川・阿賀野川河口の合流

による地形変動が原因です。これに拡張された古新潟町が今に継承された可能性が高いと考えられます。そうなるとその位置づけは重要で、古新潟町は考古学的には未確認ですが、細かな地形をみれば、寺町西側から海岸砂丘の間に埋もれているとみられます。新潟は戦国時代から歴史に登場しますが、平成二十一(二〇〇九)年に確認された新資料により、一五二〇年代から六〇年代までは、現在地から五キロほど上流、西川との合流点に近い「平嶋」に所在したことが判明しました。おどろきです。じつは他所からの移転を示唆する資料がありました。総合的に勘案すれば、移転は市史がいう天正年間(一五七三〜九二)だと思われまます。中世から近世へ大きく転換するこの時期、新潟は川湊から日本海交通と直結した河口の港町へと転身をとげたといえます。新潟の原点が少し見えてきた気がします。みなとぴあではこの二月三月に企画展「近世新潟町」、館長講座「みなとまち新潟の原点をさぐる」を開催します。乞うご期待。

## 収蔵資料紹介

### 小島丹漾画「夏日」

当館には、新潟市公会堂に於て飾られていた作品が何点か所蔵されています。行田魁庵、中島萬木、須田霞雪、松原米山、小島丹漾、いずれも縦横一メートルを超える大きな作品です。新潟市公会堂は昭和十三(一九三八)年十一月二十一日に開館、石油で財を成した新津恒吉が市に寄贈したものです。これらの絵画は、開館にあたり揮毫を依頼したもので、または寄贈されたものと言われています。または寄贈されたもの(一九四)年十一月一日まで飾られていました。この「夏日」もその中の一点で、昭和十一(一九三六)年、丹漾三十四歳の作品です。院展に初入選の昭和四(一九二九)年以降なかなか入選できず、苦しみ、ようやく二回目に入選したのが本作品です。

ところが、新潟の風景や人々を描いたものではなく、生前を知る方たちが語る「丹漾さん」の人のままに、作品に描かれる人々や風景、雪までも、温もりが感じられます。初期は本作品のように大きな自然の中に日常生活を営む人々を小さく描く素朴で抒情的な画風でしたが、作風は大きく変化し、次第に黒く太い造形的な描線で、人物とりわけ群衆を描くようになっています。そして「同人」となった最晩年の作品「白炎浄土」北越雪譜吹雪の章より(南魚沼市鈴木牧之記念館蔵)では、造形と心情表現のバランスのとれた画面で、新たな画境を見ることが出来ます。しかし、完成された作品はわずかこの一点のみ、未完の作品(新潟市美術館蔵)が残されていますが、突然の死が惜しまれます。

(大森 慎子 学芸員)

